

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K12803

研究課題名（和文）『チャンドラ文法詳解』研究：仏教徒におけるインド伝統文法学の受容とその影響の解明

研究課題名（英文）A Study of the Candravyakaranapanjika 1.3 of Ratnamati

研究代表者

矢崎 長潤（Yazaki, Chojun）

広島大学・人間社会科学研究科（文）・日本学術振興会特別研究員（PD）

研究者番号：90855446

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円

研究成果の概要（和文）：『チャンドラ注釈』および『チャンドラ文法詳解』（第1巻第3章）の写本解読、異読の記録や引用元の調査などの作業は、すべて完了している。最終確認作業を可及的速やかに行い、研究成果を公にしたい。新資料に基づく研究は、チャンドラゴーミンの文法がパーニニ文法学の伝統形成に影響を与えていたこと、仏教徒がインドの伝統文法学の形成と発展とに関与していたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、仏教の滅亡とともにインド本土から姿を消した伝統文法の姿を今に復元することで、新たな知見を生み出す基盤を提供するものである。今なおインドに生きている伝統学問のパーニニ文法学でさえも、その発展史の一端を紐解けば、外的影響に対する反応が見て取れる。師資相承による学問継承の純粹性のみがしばしば強調されるが、自己と他者とを判別できるような個性こそが、伝統の命脈を保つ一因となっていたに違いない。

研究成果の概要（英文）：All of the tasks for the editorial work of the Candravrtti and the Candrapanjika 1.3, namely, deciphering the manuscripts, noting variant readings, and investigating the sources of the quotations, have been completed. The outcome of this research will be made publicly available soon after finalizing the text.

In addition, a study based on new material revealed that Candragomin's grammar influenced the Paninian grammatical tradition, and also that Buddhists were closely involved in the development of traditional Indian grammatical studies.

研究分野：インド哲学仏教学

キーワード：パーニニ サンスクリット文法学 パタンジャリ チャンドラゴーミン ラトナマティ バルトリハリ
チャンドラ文法学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

パーニニ (Pāṇini, 紀元前 5-4 世紀頃) のサンスクリット語文典『八課集』(*Aṣṭādhyāyī*) を核とするパーニニ文法学は、サンスクリット語を使用する者たちにとっての共通の学問であった。これは仏教にとっても例外ではない。ブッダは弟子たちに対してヴェーダ語やサンスクリット語にて教えるを禁じたことと伝承されるが、ブッダの入滅から数百年後、多くの経典や哲学書、仏伝文学などがサンスクリット語で著されていった。経典や論書などがサンスクリット語で編纂される以上、仏教徒にとってもパーニニ文法学は重要であった。

ただし、文法学は、パーニニの学問伝統だけに限定されるわけではない。仏教徒やジャイナ教徒は、パーニニの文法体系の影響を強く受けつつも、独自に新しい体系を構築していった。パーニニの文法体系に属さない、いわゆる非パーニニ文法学と呼ばれる文法体系の一つに、仏教文法家チャンドラゴーミン (Candragomin, 5 世紀頃) によって確立されたチャンドラ文法学 (*Cāndravākyāraṇa*) がある。この文法体系は、インドはもとより、ネパール、チベット、スリランカなどの仏教文化圏のなかで普及し、仏教徒のなかで広く受け入れられた。

パーニニ文法学に対する研究の充実度や蓄積に比べれば、チャンドラ文法学に対する研究は充分に行われてきたとは言いがたい。20 世紀初頭、ブルーノ・リービッチ (Bruno Liebig, 1862-1939 年) は、この文法体系の基礎文献『チャンドラ規則』(*Cāndrasūtra*) や『チャンドラ注釈』(*Cāndravṛtti*) などの批判校訂本を出版した。しかし、後者の校訂テキストの約三分の二は、一本の写本に依拠したものであった。それゆえ、その信頼性がしばしば問われてきた。さらに、この基礎文献に対して、スリランカの仏教徒ラトナマティ (Ratnamati, 異名 Ratnaśrījñāna, 900-980 年頃) の注釈書『チャンドラ文法詳解』(*Cāndravākyāraṇanapañjikā*) の写本の現存が報告されている。しかし、これはいまだ出版されていない。チャンドラ文法学に対する研究、ひいてはインド伝統文法学の発展史の解明のために、リービッチの校訂テキストの見直しと『チャンドラ文法詳解』の校訂テキストの作成が望まれている。

リービッチの研究以降、チャンドラ文法学に対する研究は活発に行われたわけではないが、近年、新たな写本の発見も相まって研究状況が変化してきた。T. オーバーリース教授 (ゲオルク・アウグスト大学ゲッティンゲン、ドイツ) や R. ティマルシナ博士 (同大学) などは、チャンドラ文法学の未出版文献の研究を進めている。また、D. ディミトロフ博士 (フィリップ・マールブルク大学、ドイツ) は、2016 年に上述のラトナマティに関する包括的研究を発表した。ディミトロフ博士は、M. デオカル教授 (サヴィトリヴァイ・ブレ・ブネー大学、インド) と共同してラトナマティの著作に対する研究を計画しており、『チャンドラ文法詳解』もそのなかの一つに含まれている。

2. 研究の目的

本研究は、上記の二名の外国人研究者、すなわち D. ディミトロフ博士と M. デオカル教授と共同して、基礎文献『チャンドラ注釈』の見直しを含めた『チャンドラ文法詳解』の校訂テキストを作成して、公にすることを旨とする。また、上記の基礎研究から得られた新知見に基づいて、インド伝統文法学の伝統形成に対するチャンドラ文法学の影響や仏教徒におけるインド伝統文法学の受容について考察していく。

3. 研究の方法

(1) 校訂研究の方法

基礎文献『チャンドラ注釈』については、リービッチの使用した二本の写本に加えて、書写年代が比較的古いと目される四本の写本を校合した。そのうちの二本は、リービッチの写本とは異なる系統に属するものと想定される。この二本の写本の読みと、『チャンドラ文法詳解』のなかの見出し語句 (*pratīka*) との一致が頻繁に確認される。『チャンドラ文法詳解』については、二本の写本と一本の断片写本に基づいて作業を進めた。なお、『チャンドラ文法詳解』には、『ラトナティの注釈への手引き』(*Ratnamatipaddhati*) なる複注文献が写本で存在する。これも校訂研究において参照した。

(2) 研究の進め方

校訂研究では、外国人研究者と共同して作業を進めた。新型コロナウイルス感染症の世界的流行によって、ドイツ、インドあるいは日本で対面での研究遂行が困難になってしまったので、スカイプ (インターネット通話サービス) などを利用して、写本の画像データをコンピューター画面で共有しながら写本の解読を進めた。組版ソフトウェアを利用してデータ入力を行い、校訂テキストの最終的な印刷イメージを意識しながら作業を推進した。

(3) 引用元などの調査

『チャンドラ文法詳解』において、ラトナマティは、チャンドラ文法学の補助文献『動詞語根リスト』(*Dhātupāṭha*) や『解釈規則』(*Paribhāṣāsūtra*) などだけではなく、パーニニ文法学の『八

課集』、パタンジャリ (Patañjali, 紀元前 2 世紀頃) の『大注釈書』(*Mahābhāṣya*) についても言及している。また、ラトナマティは、『八課集』全体に対する最古の注釈書『カーシカー注釈』(*Kāśikāvṛtti* , 7 世紀頃) やこれに対する注釈書『ニヤーサ』(*Kāśikāvivarāṇapañjikā/Nyāsa* , 8 世紀頃) などについても言及する。校訂テキストでは、こうした引用元を調査して明記した。

(4) パーリ文典におけるパラレル箇所 の 同 定

校訂作業を進めていくなかで、『チャンドラ文法詳解』が、パーリ語文典『モッガラーナ文法』(*Moggallānavyākaraṇa* , 12 世紀) に対してきわめて大きな影響を与えていることが明らかとなった。これにより、当初の計画にはなかったが、両テキストの並行表現を調査する必要が出てきた。また、チャンドラ文法学の補助文献『動詞語根リスト』と同パーリ文典の『動詞語根リスト』とのあいだにも並行表現があることが分かってきた。これについても同様の調査を行い、パラレル表現を同定した。上記の調査結果は、校訂作業に活用されている。

(5) ほ かの 研 究 課 題 と の 相 互 利 用

『チャンドラ文法詳解』は、『動詞語根リスト』などの補助文献をしばしば引用するが、これが現行のリービヒの校訂テキストと一致しないばあいが見られた。別の研究課題 (JSPS 科研費 22J00212) で進めている『チャンドラ文法詳解』第 2 巻第 1 章における、そうした引用と比較しながら、両研究の成果を相互に利用した。これにより、完成度の高い研究成果を生み出すように努めた。

4 . 研 究 成 果

(1) 校 訂 研 究 の 進 捗 状 況

基礎文献『チャンドラ注釈』および『チャンドラ文法詳解』第 1 巻第 3 章の写本解読、異読や引用元の調査などの作業はすべて完了している。新型コロナウイルス感染症の流行で対面での研究実施ができなかったことや想定外の作業が発生したことで、校訂テキストの最終確認に遅れが生じている。いままでは写本のみでしか利用できなかった一次資料を提供することになるので、確認作業を慎重に行いつつも、可及的速やかに成果を公にしたい。

(2) 2020 年 度 の 研 究 成 果

本研究の初年度 (2020 年度) には、国内学会や研究会にて研究発表を 3 件 (ただし、新型コロナウイルス感染症の影響によりいずれもオンライン開催)、学術雑誌に 2 本の論文を投稿した。このなかで、インド伝統文法学の伝統形成に対するチャンドラ文法学の影響について、次の点を論じた。パーニニ文法学者のカイヤタ (Kaiyata , 11 世紀) は、パタンジャリの『大注釈書』に対する注釈書『灯明論』(*Mahābhāṣya-Pradīpa*) のなかで、チャンドラ文法学に対する批判を展開している。このことは、チャンドラ文法学が、当時のパーニニ文法学者のなかで周知のものとなっていたことを示唆する。チャンドラゴーミン、ジャヤーディトヤ、ジネーンドラブディ、そしてラトナマティは、パーニニ文法学とチャンドラ文法学とを支持する立場に分かれて議論を展開している。こうした文法学者たちは、いずれも仏教徒であった。仏教徒は、かつてヴェーダの補助学としてバラモンたちの占有物であった知識体系をすでに手中に収めており、パーニニ文法学の伝統形成と発展とに関与していたことが推察される。なお、コロナ感染症の影響によって、2020 年 8 月に韓国 (ソウル) にて開催予定であった国際仏教学会は、翌年 (2022 年 8 月) に延期となった。

(3) 2021 年 度 の 研 究 成 果

本研究の二年目 (2021 年度) には、チャンドラゴーミンとパーニニ文法家のバルトリハリ (Bhartrhari , 5-6 世紀) の 対象 (*karman*) 理解について、国内研究会にて研究発表 (1 件) を行った (オンライン開催)。なお、コロナ感染症の影響によって、2021 年 8 月に開催予定であった国際仏教学会 (韓国・ソウル) は、翌年 (2022 年 8 月) に再延期となった。同様に 2022 年 1 月に予定されていた国際サンスクリット学会 (オーストラリア・キャンベラ) も翌年度 (2023 年 1 月) に延期となった。

(4) 2022 年 度 の 研 究 成 果

本研究の最終年度 (2022 年度) には、国内学会にて研究発表 (1 件) を行った。また、国際雑誌に英語論文 (1 本) を投稿して以下の点を論じた。チャンドラゴーミンの文法体系は、近現代の研究者によって「仏教文法」と呼ばれてきた。そのため、この文典には何らかの仏教的な特徴が存するとの想定が研究者によってしばしばなされてきた。とくに仏教教理の「縁起」の語義的解釈において、チャンドラ文法学の解釈が援用されているとの指摘がなされていたが、この見解を本研究の新資料に基づいて訂正した。また、今後の研究のための基礎的研究を提供することを目的とし、チャンドラ文法学に関する先行研究を網羅的に渉猟した研究書 (単著) を出版した。これには本研究の成果の一部が活用されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 矢崎長潤	4. 巻 69 (1)
2. 論文標題 パタンジャリと非パーニニ文法学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 480 - 477
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 矢崎長潤	4. 巻 66
2. 論文標題 パーニニ文法学の伝統形成におけるチャンドラ文法学の影響	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東海佛教	6. 最初と最後の頁 90 - 77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Chojun Yazaki	4. 巻 172 (2)
2. 論文標題 Candrakirti's Linguistic Explanation of Pratityasamutpada from the Perspective of the Panini and Candra Grammars	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Zeitschrift der Deutschen Morgenlandischen Gesellschaft	6. 最初と最後の頁 173-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 矢崎長潤
2. 発表標題 バルトリハリとチャンドラ文法学：チャンドラゴーミンのkarman 論再考
3. 学会等名 広島サンスクリット集会
4. 発表年 2021年

1．発表者名 矢崎長潤
2．発表標題 パタンジャリと非パーニニ文法学
3．学会等名 日本印度学仏教学会第71回学術大会
4．発表年 2020年

1．発表者名 矢崎長潤
2．発表標題 『チャンドラ文法』研究序説
3．学会等名 第二回広島サンスクリット集会
4．発表年 2020年

1．発表者名 矢崎長潤
2．発表標題 チャンドラ文法学に継承されるパタンジャリの見解
3．学会等名 インド思想史学会第27回学術大会
4．発表年 2020年

1．発表者名 矢崎長潤
2．発表標題 仏教文法家チャンドラゴーミンのカーラカ理論：A 2.3.1 anabhihite不要論
3．学会等名 西日本インド学仏教学会第32回学術大会
4．発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1．著者名 矢崎 長潤	4．発行年 2022年
2．出版社 法蔵館	5．総ページ数 310
3．書名 チャンドラゴーミン研究序説	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	フィリップ・マールブルク大学			
インド	サヴィトリヴァイ・ブレ・ブ ネー大学			